

川越町の子どもたちの学力向上に向けて

～全国学力・学習状況調査の結果報告～ その1

令和5年 9月
川越町教育委員会

本年4月、小学校6年生及び中学校3年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」の結果概要をお伝えします。川越町教育委員会では、結果からわかる、子どもたちの「強み」「弱み」等の傾向をとらえ、具体的な施策に反映していきます。つきましては、保護者の皆様には、家庭生活や生活習慣の見直しに向けてご協力をお願いいたします。

なお、この調査は学力の特定の一部分を測るものであり、学力のすべてを測るものではないことをご理解ください。



1. 学力・学習状況調査結果

(1) 川越町小学校

□全体の傾向

国語

全国比（全国平均正答率）を上回っており、正答数分布グラフから中央値（※1）が全国より1.0ポイント高くなっている。

評価の観点（※2）別に見ると、「知識・技能」の項目は4.9ポイント、「思考・判断・表現」の項目は4.1ポイント、全国比を上回っている。

学習指導要領の内容（※3）別に見ると、「話すこと・聞くこと」の項目は6.2ポイント、「書くこと」の項目は4.4ポイント、「読むこと」の項目は2.0ポイント全国平均を上回っている。

算数

全国比を上回っており、正答数分布グラフから中央値が1.0ポイント高くなっている。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は4.7ポイント、「思考・判断・表現」の項目は5.6ポイント、全国比を上回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「数と計算」の領域で4.9ポイント、「図形」の領域で2.4ポイント、「変化と関係」の領域で4.7ポイント、「データの活用」の領域で9.2ポイント全国比を上回っている。

※1 中央値

小さい数値（あるいは大きい数値）から順に並べたときに真ん中に来る数値

※2 評価の観点

学習指導要領において、児童生徒が学校教育の中で身につけるべき力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に対応した形で評価する際の3つの観点

○「知識・技能」・・・各教科で身につけるべきとされている知識やスキル

○「思考力・判断力・表現力」・・・課題や問題に向き合って解決していく力や友だち

- と協働しながら問題解決の糸口を見つけていく力、自らの思いを表現していく力
- 「主体的に学習に取り組む態度」・・・児童生徒自身がいかに学習を調整して、知識を習得するために試行錯誤しているか

※3 学習指導要領の内容

学習指導要領において、各教科に求められる内容。例えば小学校国語科であれば「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」など、小学校算数科であれば「数と計算」「図形」「変化と関係」などに分かれている。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

	強みと弱み (強み・・・「◎」 弱み・・・「◇」)
国語	<p>◎原因と結果など情報と情報との関係について理解している。(＋8.8)</p> <p>◎漢字を文の中で正しく使うことができる。(＋13.1)</p> <p>◎文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。(＋6.7)</p> <p>◎目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。(＋9.3)</p> <p>◇情報と情報との関係付の仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。(－4.4)</p>
算数	<p>◎伴って変わる二つの数量の関係が比例の関係にあることを用いて、知りたい数量の大きさを求め方と答えを記述できる。(＋5.4)</p> <p>◎正三角形の意味や性質について理解している。(＋7.4)</p> <p>◎小数の加法や乗法を用いて、求め方と答えを記述し、その結果から条件に当てはまるかどうかを判断できる。(＋11.0)</p> <p>◎百分率で表された割合について理解している。(＋9.6)</p> <p>◎「以上」の意味を理解し、示された表から必要な数を読み取ることができる。(＋6.3)</p> <p>◎棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見出した違いを言葉と数を使って記述できる。(＋16.0)</p> <p>◎二次元の表から、条件に合う数を読み取ることができる。(＋5.3)</p> <p>◇台形の意味や性質について理解している。(－3.4)</p>

(2) 川越町中学校

□全体の傾向

国語

全国比（全国平均正答率）を下回っているが、正答数分布グラフから中央値は全国と同等。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は3.1ポイント、「思考・判断・表現」の項目は0.9ポイント、全国比を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「書くこと」の項目は0.7ポイント全国比を上回っている。「話すこと・聞くこと」の項目は0.4ポイント、「読むこと」の項目は2.1ポイント全国比を下回っている。

数学

全国比と同等で、正答数分布グラフから中央値も同等。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は0.1ポイント、「思考・判断・表現」の項目は0.4ポイント、全国比を上回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「数と計算」の領域で全国平均と同等、「関数」の領域で全国比を2.4ポイント上回っているが、「図形」の領域で0.4ポイント、「データの活用」の領域で1.7ポイント下回っている。

英語

全国比を下回っており、正答数分布グラフから中央値も1.0ポイント低い。

評価の観点別に見ると「知識・技能」の項目は3.5ポイント、「思考・判断・表現」の項目は0.2ポイント、全国比を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると「聞くこと」の項目は1.5ポイント、「読むこと」の項目は1.3ポイント、「書くこと」の項目は3.4ポイント全国比を下回っている。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

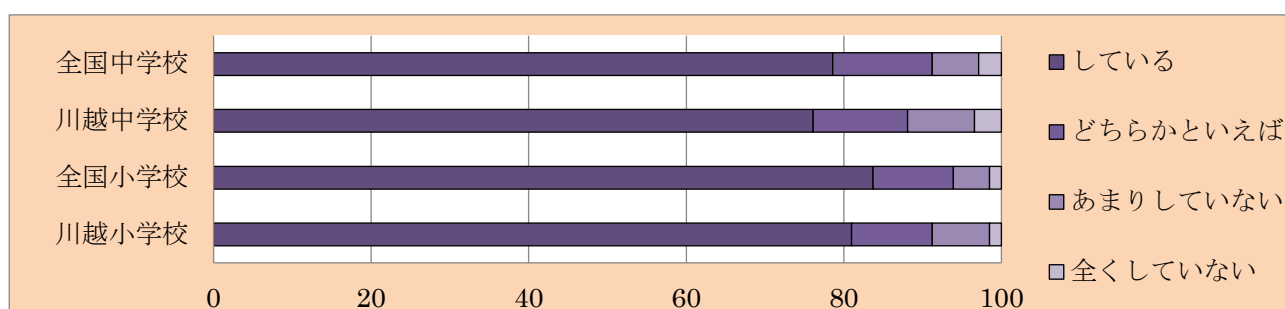
	強みと弱み（強み・・・「◎」 弱み・・・「◇」）
国語	◎読み手の立場に立って、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができる。（+7.0）
	◇観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考える。（-6.7）
	◇文脈に即して漢字を正しく書くことができる。（-12.0）
	◇具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。（-7.2）
	◇自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができる。（-5.7）

数学	<p>◎自然数の意味を理解している。(+11.9)</p> <p>◎複数の集団のデータの分布の傾向を比較して捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する。(+8.4)</p> <p>◇累積度数の意味を理解している。(−15.0)</p> <p>◇目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明する。(−7.5)</p> <p>◇結論が成り立つための前提を、問題解決の過程や結果を振り返って考え、成り立つ事柄を見だし、説明する。(−5.6)</p>
英語	<p>◎社会的な問題について、短い説明の要点を捉えることができる。(+6.5)</p> <p>◇情報を正確に聞き取ることができる。(−10.6)</p> <p>◇社会的な問題について、短い文章の要点を捉えることができる。(−7.4)</p> <p>◇未来表現 (be going to) の肯定文を正確に書くことができる。(−8.5)</p>

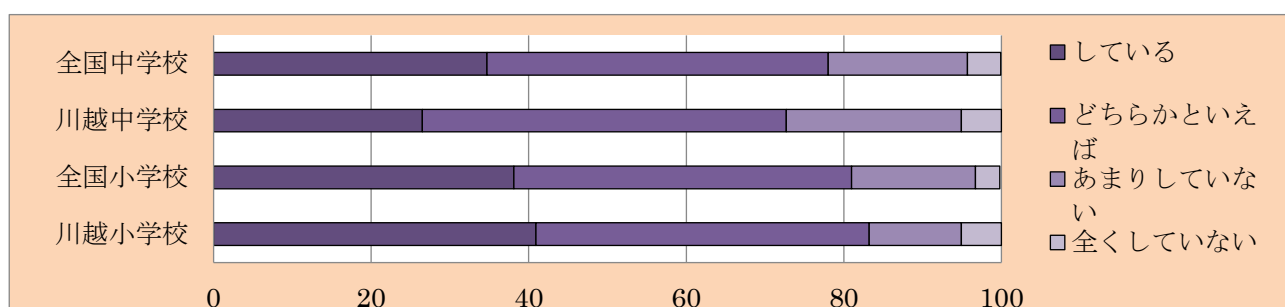
(3) 児童生徒質問紙による生活調査結果

① 基本的な生活習慣

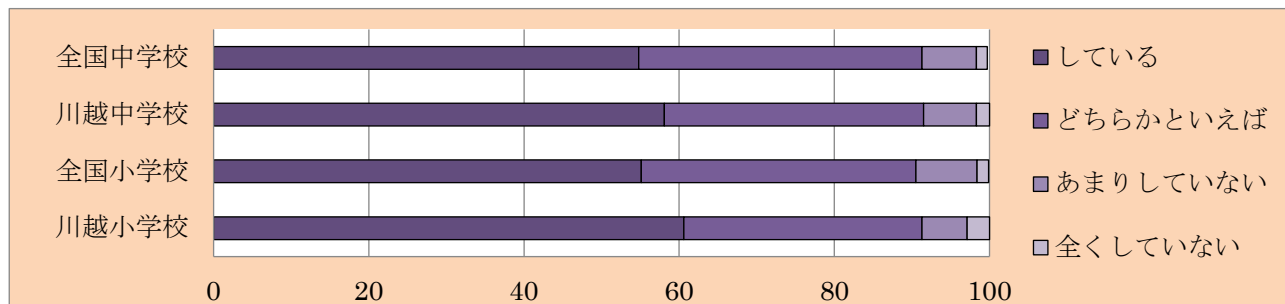
Q：朝食を毎日食べていますか。



Q：毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。



Q：毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。



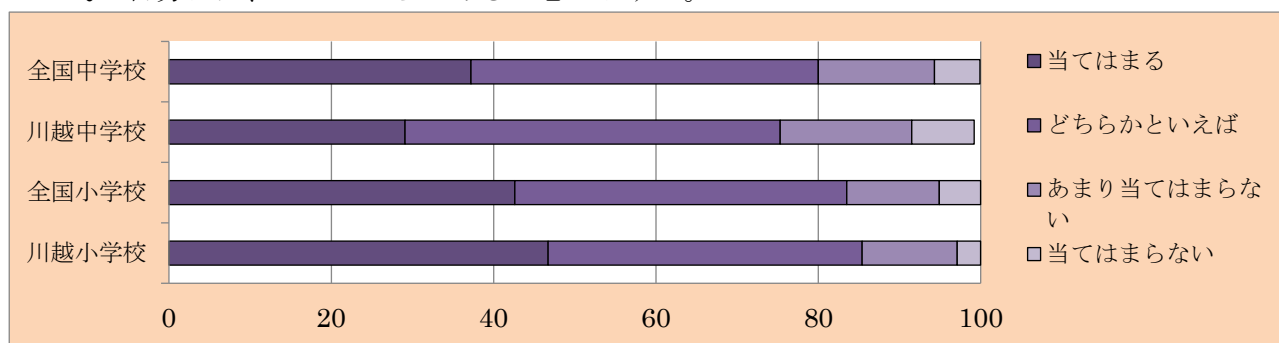
*中学校では、同じくらいの時刻に寝ている生徒の割合が、全国よりも低く、30%程度の生徒は就寝時刻が決まっていない。同じくらいの時刻に起きている生徒の割合は全国と同等で、早起きの習慣は身につけているように思われる。しかし、毎日朝食を食べていない生徒の割合は全国よりも高く、数名の生徒は朝食を食べずに登校している状況である。

小学校では、就寝時刻や起床時刻が大きく乱れている児童の割合は全国と比べても少ないが、朝食を食べずに登校している児童の割合は高くなっている。

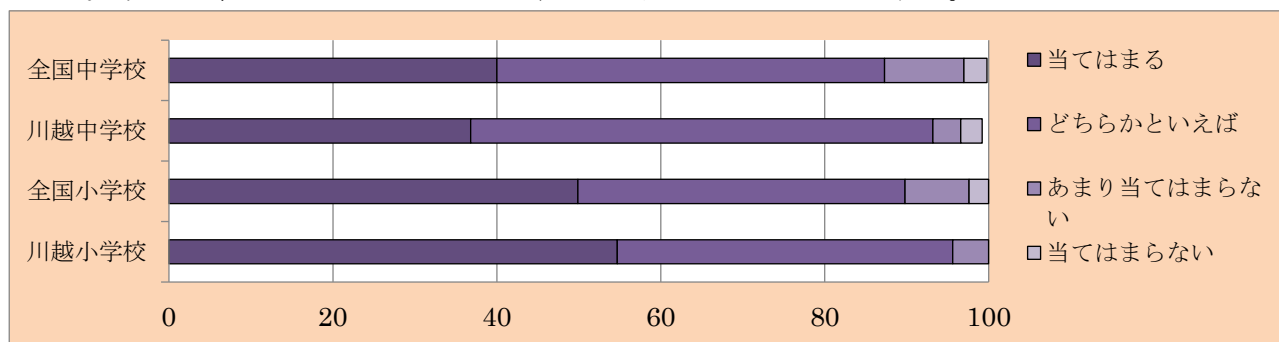
「早寝・早起き・朝ごはん」を心がけ、規則正しい生活リズムを整えることが大切である。

② 自己肯定感

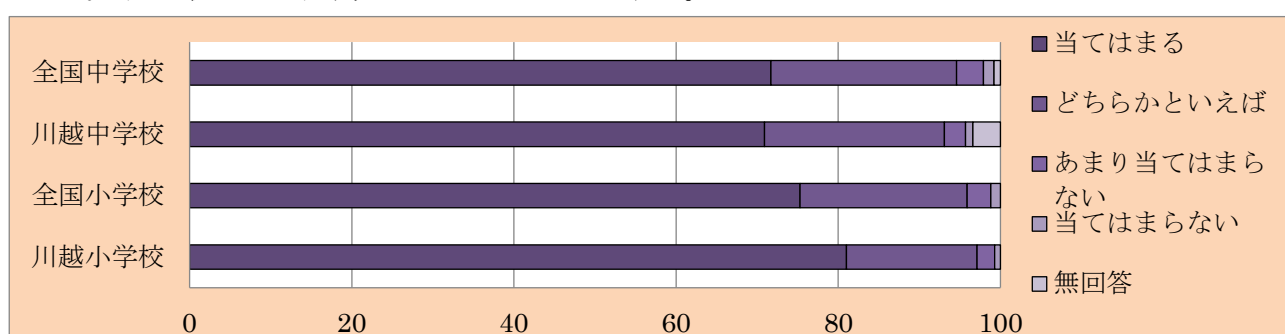
Q：自分には、よいところがあると思いますか。



Q：先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。



Q：人の役に立つ人間になりたいと思いますか。

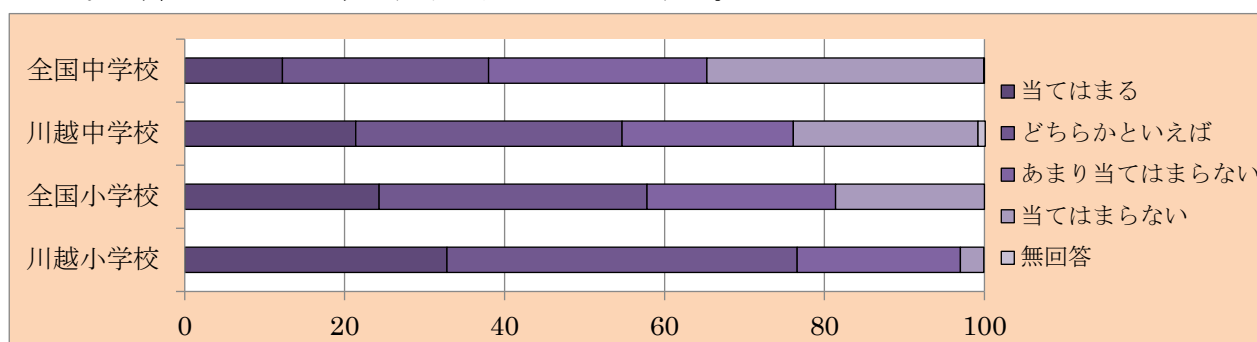


*「あなたのよいところを認めてくれていると思うか」の質問での肯定回答は、全国割合を大きく上回っており、中学校で93.2%、小学校で95.6%となっている。児童生徒の自己肯定感を育むために、学校教職員が多くの児童生徒に対して個々を認める声かけをし、その声かけが児童生徒に届いていることが伺える。小学校では自分にはよいところがあると思っている児童の割合は、全国より高くなっている。しかし、中学校では、よいところを認められていると思うものの、自分自身でよいところがあると思えている生徒が75.3%で、全国割合を下回っている。

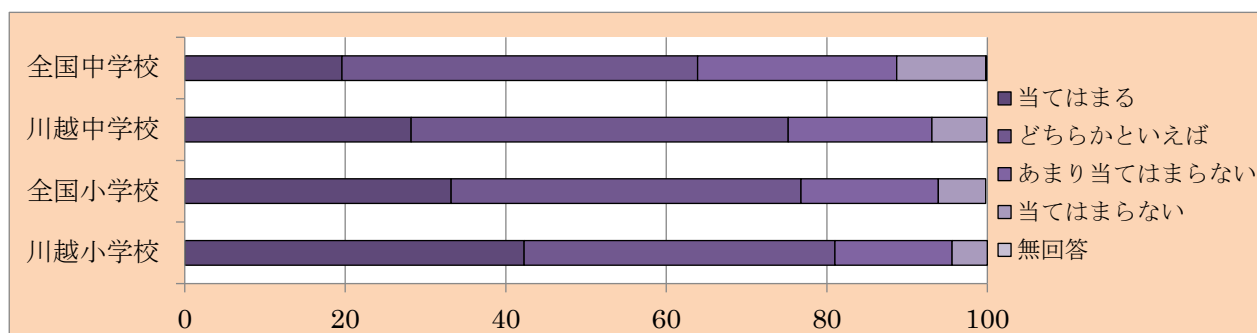
自己肯定感が高まっている児童生徒は、自己を大切にすることができるとともに他者を大切にすることもできる。そのため、小学校においては、人の役に立つ児童の割合が全国より高くなっているのだと考える。

③ 地域や社会に関わる活動の状況

Q：今住んでいる地域の行事に参加していますか。



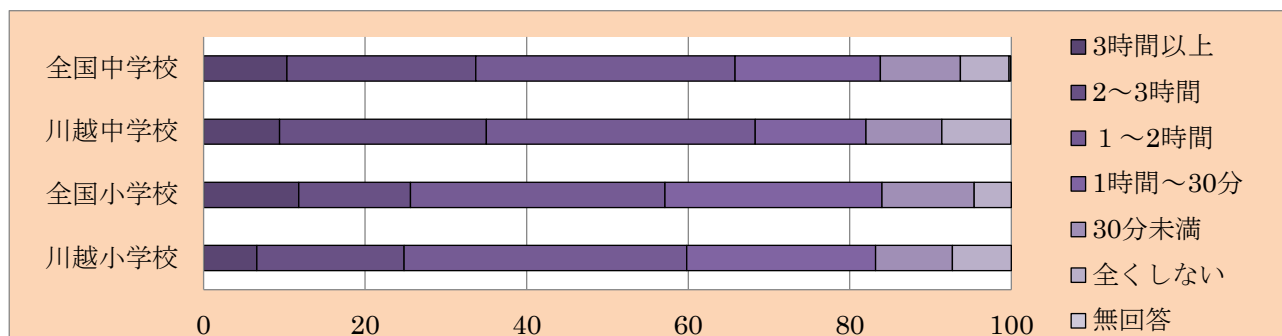
Q：地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。



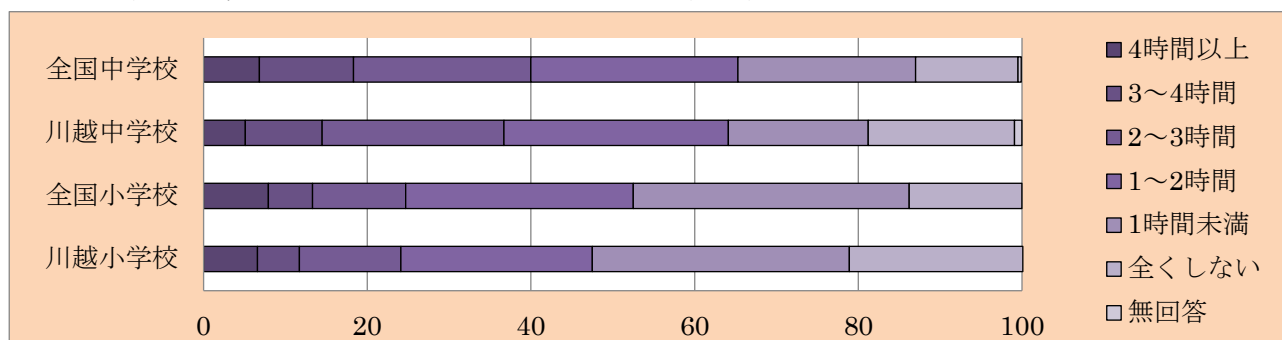
*小中学校ともに、地域の行事に参加している児童生徒の割合は全国より高く、地域に児童生徒が根付いていることが伺える。また、地域や社会をよくするために何かしてみたいと思っている児童生徒の割合も全国より高く、児童生徒が地域に対して感謝の気持ちを持ち、地域のために主体的に行動したいという思いが持っていることも伺える。

④ 学習習慣

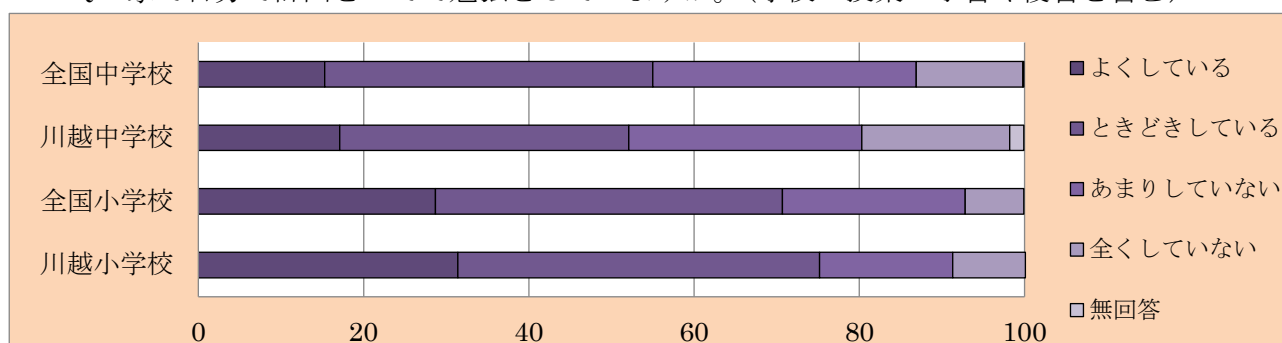
Q：学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む）



Q：土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。
(学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む)



Q：家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。(学校の授業の予習や復習を含む)

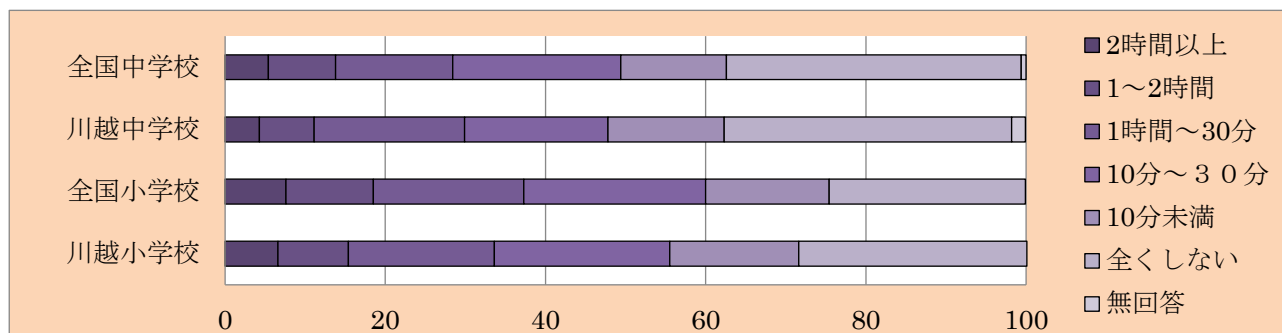


*平日の学習時間では、小中学校ともに1時間以上家で勉強している児童生徒の割合は、小学生では約60%、中学生では約70%で全国を上回っており、平日は家庭学習の習慣が身につけている児童生徒が多い。しかし、学校が休みの日の学習時間では、小中学校ともに1時間以上家で勉強している児童生徒の割合は、全国よりも低い結果となった。休日は家族との時間を大切にしていることや地域の行事等に参加していたり、部活動等に参加していたりすることが影響しているのではないかと考えられる。

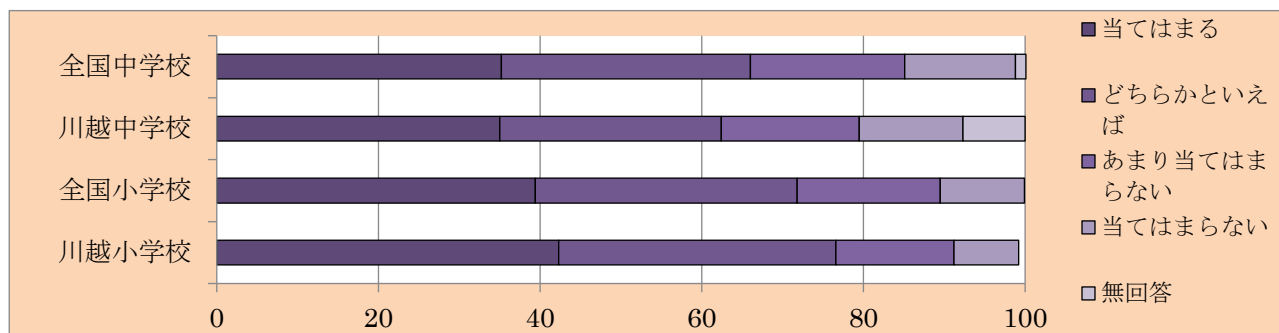
自分で計画を立てて勉強しているかの問いでは、肯定回答をした生徒の割合は約50%となっており、全国を下回っている。各教科から出される課題に学習時間の多くが使われ、自主的な学習まですることが難しい状況が考えられる。また、肯定回答をした児童の割合は約75%となっており、全国を上回っている。各小学校で取り組んでいる「家庭学習習慣」等により宿題以外に自主的に学習を進める習慣が身につけていると考えられる。

⑤ 読書習慣

Q：学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。(電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)



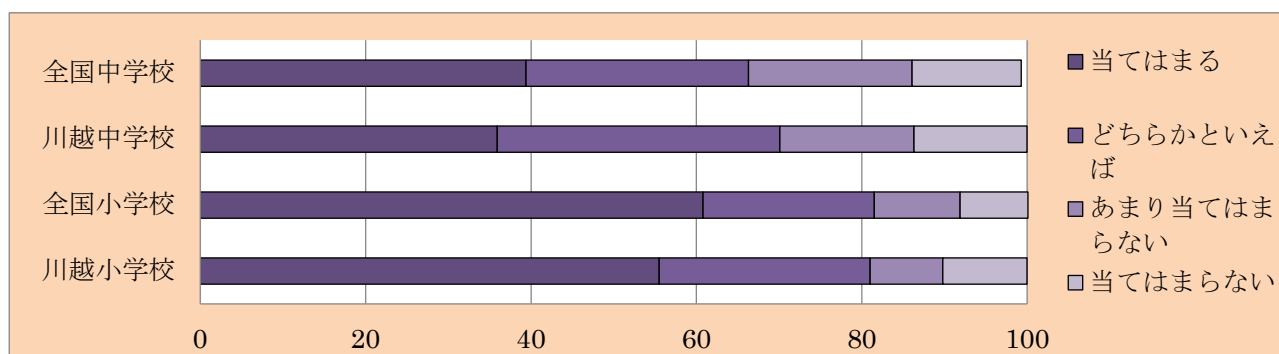
Q：読書は好きですか。



* 平日の学校の授業時間以外の読書時間では、30分以上読書をしている割合は中学校では約30%となっており、全国を上回っている。小学校では約35%となっており全国を下回る結果となった。また、生徒の約35%、児童の約30%は学校の授業時間以外に全く読書をしていないことが分かった。授業以外の場面で児童生徒の読書活動推進に向けて、学校図書館の効果的な利用法や家庭読書推進の啓発に向けての取組を検討していかなければならない。また、読書が好きと回答した生徒の割合は約60%となっており、全国を下回っている。読書が好きと回答した児童の割合は約75%となっており、全国を上回っている。中学校では家庭学習や部活動等で忙しくなり、読書をするための時間の確保が難しく、読者離れが進んでしまう傾向があるのではないかと考えられる。

⑥ キャリアの形成

Q：将来の夢や目標を持っていますか。



* 将来の夢や目標を持っている生徒の割合は約70%となっており、全国を上回っている。児童の割合は約80%となっており、全国とほぼ同等になっている。コロナ禍において児童生徒に将来の目標や夢を持たせられるような取り組みが中止になっていたりしていたが、徐々にコロナ禍においても実施可能な方法を探りながら取り組みを進めてきたことが結果につながったと考える。

(4) 学校質問紙の結果からみえる児童生徒の姿

① 言語活動の充実と自分の考えを深め、表現する力を育成する取り組み

新たな学習指導要領に沿った教育活動が行われるようになり、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることや児童生徒の発達の段階を考慮して、児童生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実することが求められている。言語活動については「言語活動について、国語科を要としつつ、各教科の特質に応じて学校全体として取り組んでいますか」の

問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、川越町内のすべての学校において、児童生徒の学習の基盤をつくる活動として国語科のみではなく、あらゆる教科等で言語活動に取り組んでいることが分かる。「話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思いますか」「話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、各校で指導者が学習指導要領に示された子ども達につけるべき力を意識したうえで、言語活動を取り入れた授業構成を考え、実践していることが分かる。児童生徒質問紙にある「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という問いに対して肯定的な回答をした児童は昨年度 71.4%から 86.1%、生徒は昨年度 81.9%から 84.6%と昨年度を上回っており、児童生徒自身も話し合い活動を行うことが、自分の学びにつながっていることを実感していることが伺える。今後も子ども達に基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むために各教科等の中で、ねらいをもった話し合い活動等を進めていく必要があると考える。

② 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と ICT 機器の効果的活用

「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。また「習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」という問いに対してもすべての学校で肯定的な回答をしている。このことから学校は学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業実践を行っていることが伺える。児童生徒質問紙にある「これまでに受けた授業では課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに対しても肯定回答は、小学校では 80.3%、中学校では 85.4%となっており、全国を上回る結果となっている。児童生徒質問紙にある「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という問いに対して、小学校では 83.9%、中学校では 77.0%が肯定的な回答をしており、全国を上回っている。子どもたち自身に、授業の中で、「何を学ぶか」が明確になっており、授業のふりかえりをおして、次の学習の意欲につながられているのだと考えられる。今後も川越町が大切にしている「めあてとふりかえりのある授業」を実践し、子ども達に「何を学ぶのか」という学習の目的意識をはっきり持たせたいと、授業に臨ませ、「どのように学ぶのか」を意識させた授業改善を進めていく必要があると考えている。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、一人一台タブレット端末は一つのツールとなっている。「児童生徒一人ひとりに配備された PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度活用しましたか」の問いに対しては、全ての学校が「ほぼ毎日」と回答している。また、児童生徒質問紙にある「これまで受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用しましたか」という問いでは週 3 回以上と回答した割合が、小学校では 72.2%、中学校では 94.9%となっており、全国を大きく上回っている。さらには、児童生徒質問紙にある「学習の中で PC・タブレットなどの ICT 機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」の問いに対する肯定回答は、小学校では 91.1%、中学校では 99.1%となっており、児童生徒自身も ICT 機器の学習効果を実感しているように思う。しかし、「教職員と児童生徒のやり取りの場面」や「児童生徒同士がやりとりする場面」での活用頻度に対する問いに対しては、「週 1 回以上」と回答する学校も見られ、今後も教職員の ICT 活用に関する研修会を行い、どのような場面で、どのように活用することがより効果的な活用になるのか等研修を深めていく必要があると考えている。

③ 自己肯定感・自己有用感の育成（自尊感情）

「これまでに学校生活の中で、児童生徒一人ひとりのよい点や可能性を見つけ評価する（褒

めるなど) 取組を行いましたか」という問いに対して、全ての学校が肯定的な回答であった。児童生徒質問紙においても「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに小学生は昨年度 80.6%から 95.6%、中学生は昨年度 84.5%から 93.2%と肯定回答が昨年度を大きく上回った。この二つの結果から、指導者が、学校教育活動の様々な場面で児童生徒の姿を見取り、「認め」「褒め」「励ます」といったことを繰り返し行っていることが伺え、児童生徒の個性を大切にしながら、豊かな心の育成に取り組んでいることが分かる。そして、児童生徒も指導者が自分たちのことを見てくれているという思いを持っていることが分かる。一方で「自分には、よいところがあると思いますか」の問いに対しては小学生で 85.4%、中学生で 75.3%が肯定回答となっている。児童生徒は「先生たちは自分のことをよく見てくれて、認めてくれているけど、自分自身には自信が持てない」と感じているのではないかと考えられる。今後も引き続き児童生徒の姿を見取り、「認め」「褒め」「励ます」ことを行っていきたい。

学校教育活動において自尊感情の育成には、個々の児童生徒が学習の場面において「できた」「わかった」という満足感や充実感を持つことや、学校生活での仲間とのかかわりの中で、認められることや受け入れられることが重要な要素になると考える。しかし、学校教育活動の中だけでは自己肯定感・自己有用感の育成は行えず、家庭や地域とともに育成していくことが重要であると考えている。一人ひとりのよい点や可能性を見つけ、よいタイミングで評価や承認を行うことが自己肯定感・自己有用感の育成につながる。今後も家庭・地域・学校が一体となって子ども達を見守りながら、成長の後押しをしていきたいと考えている。

2. 学力・学習状況調査結果の「弱み」を改善するための対策



全体を通して

全教科において、教科特有の「見方・考え方」、つきたい力を明確にし、「何を学ぶか」という必要な指導内容だけでなく、「何ができるようになるか」を重視し、そのために「どのように学ぶか」という学習過程を大切にした**授業改善**を進める。

1. 「めあての提示と振り返る活動」(目標の提示、振り返り活動)のある授業の徹底を図り、子どもたちが一時間の授業の見通しを持ち、授業の中で「できた・わかった」と実感が持てる学習へつなげる。
2. 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を行う。
3. ICT 機器の効果的な活用を探り、授業改善を行う。
4. 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く力をつけるための指導を行う。
5. 一人ひとりの学習状況を十分とらえ、少人数による効果的な指導を行う。

国語

1. **基礎的な力をつける時間の確保**
 - ・漢字の定着のために、ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、定着に向けた取り組みを進める。
2. **書くことの指導の充実**
 - ・書く活動において、児童生徒の興味関心に応じた題材を設定し、子どもたち自らが書くようになる気持ちを高める手立てを講じ、児童生徒が主体的に取り組めるように工夫する。
 - ・発達段階に応じて「字数制限やテーマなどの条件を与えて書く活動」を、授業の中に継続的に取り入れていく。(国語に限らず他教科においても「条件を与えて書く」活動を行っていく)
 - ・自分の考えを文章として書く際には、自分の考えの根拠となることを明らかにしながら

書く活動を取り入れていく。

3. 読む力を育成する指導の充実

- ・小学校低学年段階での MIM-PM の取り組みを継続して行い、「読み」に対して苦手感を感じている子どもに、早期に指導を行えるようにしていく。
- ・説明文においては、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけられるような指導を行えるようにしていく。
- ・いろいろな文章や作品に出会わせるために、読み聞かせの機会を充実したり、選書コーナーを設置したりするなど、各校において読書活動や学校図書館での活動を工夫する。

4. 自分の考えをまとめる活動の充実

- ・授業における話し合いや毎時間のめあてに対するふりかえりの中で、自分の考えをまとめる活動を取り入れる。発達段階や内容に応じて、字数制限やキーワードを提示するなどの条件を与えて書かせるようにする。
- ・自分の考えをまとめたものを友だちと共有する活動を取り入れ、自分の考えと比較し、新たな考えを知りながら、考えを深めていく活動を取り入れる。その手立てとして ICT 機器の効果的な活用を進めていく。
- ・自らの問題解決に必要な資料や情報を選択・活用し、友だちと互いに意見を出し合って自分なりの考えをまとめる活動を取り入れる。さらに、まとめたものを発表する活動につなげていく。

算 数 ・ 数 学

1. 基礎的な力をつける時間の確保

- ・基礎となる内容の定着のために、ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、定着に向けた取り組みを進める。

2. わかる授業を目指した授業展開の工夫

- ・子どもたちの生活に沿った身近な課題を見出し、児童生徒が主体的に取り組める授業を展開していく。また、算数・数学の時間に学習したことを日常生活の中で活用できるように工夫する。
- ・既習事項をもとにした応用問題等に取り組ませ、子どもたちが学び合う中で、その解決方法を見い出せるような学習活動を取り入れる。
- ・言葉や数・式と、図・表・グラフなどを関連付けて考える授業を取り入れる。
- ・「ふりかえり」の時間を大切にするとともに、子どもたちの理解度を測る評価問題などを適切に取り入れる。
- ・個々の子どもたちの強み・弱みを把握し、少人数による学習活動を進める。

3. 自分の考え方や求め方を説明する

- ・算数・数学用語、数学的な表現を用いて「◎◎であるから、△△である。」の形式で記述させたり発表させたりする。
- ・ICT 機器を効果的に活用し、個々の児童生徒の考え方や求め方を交流したり、自分の考え方をまとめたりする。

英 語

1. 質問したり、答えたりしながらやりとりする活動

- ・聞き取った英語に対して、自分の考え方や答えを持ち、英語で伝える習慣をつけていく必要がある。小学生の段階からやりとりする活動を習慣化するという授業改善を行い、中学生では、自分の考えや思いをより詳細に英語で伝える力を育成していく。

2. ALT を効果的に活用した授業

- ・ALT を有効活用し、ネイティブの英語に触れる機会を増やすことで、英語を聞く力の向上を図るとともに、英語でのコミュニケーション力を育成する。



3. パフォーマンステストを実施し、個々の子どもの力を掴む

- ・児童生徒一人一人に対し、パフォーマンステストを定期的に行い、個々の児童生徒の学習内容の定着具合を把握するとともに、個に応じた指導を進めるとともに、児童生徒一人ひとりが課題を捉え、主体的な学びにつなげる。

3. 町教育委員会による手立て

(1) 少人数教育の充実

少人数での指導体制を継続し、国語科および算数・数学科を中心とした基礎的・基本的な力の向上を目指します。

(2) きめ細やかな指導体制の充実

町非常勤講師や学習支援員及びALTの配置を生かした指導のあり方をさらに充実し、一人ひとりの子どもたちが学びやすい環境づくりを進めます。

(3) 学力向上推進委員会の開催

川越町学力向上推進委員会において、各校の学力向上に向けた取組について協議・情報交流を行い、子どもたちの学ぶ力を伸ばすための授業改善を進めます。また、川越町全体で進める学力向上策について検討します。

(4) 校内研修等への訪問指導・支援

北勢教育支援事務所および町教育委員会の指導主事、学力向上アドバイザーが各校へ訪問し、学力向上に向けた校内研修への指導・支援を進めます。また、学力の定着を図るための授業のあり方について、教職員に向けた継続的な直接指導を進めます。

(5) ICT 機器を効果的に活用した授業の推進

ICT 機器を活用して、指導者と子どもたち、子どもたち同士が意見や考え方を交流しあう場面を作り上げ、主体的・対話的な授業の実現を目指します。また、ICT 機器の研修会等の校内研修への指導・支援を進めます。

(6) 家庭学習習慣及び読書活動の推進

各家庭でのTV視聴やゲームをする時間を振り返り、各校が配付している家庭学習の手引きやシラバス（授業計画）をもとに、家庭学習の定着に向けた取組を進めていきます。また、「読書旅行」や「家庭読書の日」の取り組みを推進し、小学校低学年から本に触れ合う機会を増やし、語彙量（ごいりょう）を増やしていきます。

『豊かな心』を土台とした社会で生きていく力の育成

2022年4月に改定しました川越町教育基本方針で示した通り、川越町は【『豊かな心』を土台とした社会で生きていく力の育成】を基本方針としています。

『豊かな心』を培うために必要なこと（3つ）、
「非認知能力を高めること」
「個性を大切にすること」
「相手の個性を尊重すること」 を大切にし、教育活動を行います。

